

JCA NEWS



Japan Communication Association (JCA) Newsletter

日本コミュニケーション学会ニュースレター



Japan Communication Association

新しい学会ロゴマークが制定されました

CONTENTS

1. 学会新ロゴマークのご紹介とご挨拶	1	8. 支部ニュース:	15
2. 巻頭言: 会長挨拶	3	北海道支部	15
3. 2015年度第1回理事会報告	4	東北支部	15
4. 第46回年次大会会場校案内	8	中部支部	16
5. 学術局からのお知らせ:	9	関西支部	17
第46回年次大会発表募集 (CFP)	9	中国・四国支部	17
学会誌に関するお知らせ	11	九州支部	18
学会賞募集に関するお知らせ	11	9. コラム: コミュニケーション教育5	19
6. 事務局報告	12	10. メールアドレス登録のお願い	22
7. 広報局便り	14	11. 編集後記	22

111
2016.2

日本コミュニケーション学会からのお知らせ

新しいロゴマークを掲げて

会長 五島幸一

日本コミュニケーション学会は、英語名称の変更に伴い、学会ロゴマークも一新することになりました。日本コミュニケーション学会は前身を日本太平洋コミュニケーション学会として1971年に発足しました。その後、1985年に日本コミュニケーション学会に名称変更しました。しかし、英語名称はほとんど変わらないままであったため、昨年 of 年次大会にて、Japan Communication Association(JCA)と変更しました。それに伴って、ロゴマークも変えることになりました。ここに、新しいロゴマークをお披露目します。



新しいロゴマークを掲げて、本学会のコミュニケーション研究をより一層活性化させ、他学会および他研究者に本学会の研究について理解を深めていただきたいと思いますと考えています。現在、各支部会での活動がかなり活発になり、他学会との連携もみられ、学会が力強く発展していくことを感じています。

将来的には、ICAなどの国際学会、また各国のCommunication学会と連携をして、日本におけるコミュニケーション研究が深化していくことを期待するものであります。

新しいロゴマーク決定の経緯について

この度の英語名称変更に伴う新ロゴマークの決定について、その経緯を簡単にご紹介します。会長のご紹介にありますように、今回の新しいロゴマークの決定は、日本コミュニケーション学会の活性化を促すために行われました。長年慣れ親しんできた旧ロゴですが、ロゴの原版があいまいで、色やデザインについて問題が発生していました。このような背景から、2015年の年次大会総会において英語名称を新しくしたことを契機に、新ロゴマークの作成に取り組んできました。このロゴマークの決定プロセスにおいては、透明性と公平性を重視致しました。まず、会長・副会長、各局の局長という JCA 理事会の責任者 6 名によってプロジェクトチームを作り、選考と決定を行いました。このチームが呼びかけたデザイン会社のうち、2社がコンペに参加し、それぞれの会社が4つのデザインを提案しました。本ニューズレターの事務局・広報局の報告と重なりますが、事務局長と広報局長による予備選考、そして6名の意見交換によって最終的なデザイン案を選びました。これを2015年12月25日の理事会にて承認いただき、ここにご紹介する運びとなりました。

今後は、「JCA」の新しいロゴとして活用し、日本コミュニケーション学会をさらに活性化し、学术交流を深めていきたいと考えます。本学会のジャーナルやニューズレター、支部の大会や関連事業、年次大会関連の印刷物などに使用して参ります。会員のみなさまにおかれましても、この新しいロゴに慣れ親しんでいただき、学会へのより積極的なご参加をお願いしたいと存じます。引き続き、みなさまのご支援とご協力をお願い申し上げます。

(事務局長 清宮徹)

ロゴマーク使用規則について

日本コミュニケーション学会ではロゴマークの使用規則を作成中です。規則ができあがりましたら HP 等でお知らせいたしますのでご確認ください。当面の間、ロゴマークを支部の活動などで使用なさる場合には広報局までお問い合わせ下さい。。

(広報局長 高永茂)

巻頭言

会長挨拶：コミュニケーション研究の体系化を目指して

JCA 会長 五島 幸一 (愛知淑徳大学)

コミュニケーションということばが出現した20世紀、様々な分野でいろいろな使われ方をしたことは記憶に新しい。すなわち、コミュニケーションということばは Umbrella Term であった。21世紀に入っても、相変わらずコミュニケーションという言葉は幅広く使われるという Umbrella Term としての存在感が続いている。しかし、残念ながらコミュニケーション研究が十分に理解されていないのが現状である。

国内で最初に発行されたコミュニケーション研究の専門書は、井口一郎著の「コミュニケーションの科学」であり、昭和24年7月2日に発行されている。その内容は、コミュニケーション研究の意義について記されているが、多くは新聞とラジオについて書かれており、「大衆通信」と位置付け、その重要性について述べている。したがって、日本では、いわゆるマスコミュニケーションの領域としてコミュニケーション研究が始まり、広がっていった。

今では、コミュニケーション研究が包括する範囲が広がっている。先日、JCA 中部支部研究例会が開かれ、そこで発表されたコミュニケーション研究が包括する範囲は広く、言説、言語教育、ミュージアムに話が及んでいる。それは良い意味で、コミュニケーション研究の大切さを示しているといえる。

その傾向は、国内の大学のグローバル化という事情が拍車をかけている。現在、多くの大学がグローバル化に向けていろいろ方策を検討しており、カリキュラムの中で、「コミュニケーション」という言葉を冠した授業が展開されている。すなわち、コミュニケーション教育が重視されていると言える。

多くの大学ではコミュニケーションを実用的な英語運用能力を育む科目として策定している。そのカリキュラムの一部を概観してみると、英語運用能力を涵養することを目的とする内容が多い。たとえば、Communication と称される科目には、Academic Writing, Debate, Public Speaking, または単に英語の Writing, Speaking, Listening, Reading がある。

コミュニケーションが脚光を浴びていることは良いが、重要な問題がある。たとえば、コミュニケーション科目を専門科目として開講している大学は多いが、その内容が大学によって大きく異なっていることである。専門科目として、「Media Studies」「Mass Communication」「Intercultural Ethics」を開講している大学もあれば、「Introduction to Language Studies」「Language, Society and Culture」「History of English」「Word Structure and Vocabulary」「English Poetry Culture and Society」などの言語学関係の科目をコミュニケーション科目として提供している大学もある。

このように多様な文脈で使われると、専門外の人たちにはますます意味を理解するのが難しくなり、コミュニケーションを簡単には説明できない。この状況を改善するためには、コミュニケーション研究領域の体系化を考え、それを世の中にアピールしていく必要がある。たとえば、コミュニケーション教育として、どのような科目を教養科目として取り入れるのか。また専攻、専門に合わせて、どのような科目をどのように配置(学年など)することで、より良いコミュニケーション教育を実施できるのかを検討する必要があると思われる。私たちコミュニケーション研究者は、コミュニケーションという研究領域を広く、正しく理解してもらうことに努力していく必要がある。今後も年次大会、支部研究会を通じて一層の努力を会員の皆さんと考えていきたい。



マサチューセッツ州 レキシントンにて

2015年度 第1回理事会報告

2015年12月25日(金)午後1時より、日本コミュニケーション学会の2015年度第1回理事会が、JR東京駅に隣接する「東京駅前サピアタワー」にある「関西大学東京センター」にて開催された。16名の理事の出席により理事会は成立した。

I. 会長挨拶

今年も支部大会が開催され、活発な支部活動が行われた。昭和24年に国内において初めてコミュニケーション学の専門書が発行されてから、コミュニケーションという言葉が、長い歴史の中、様々な文脈で使われるようになった。しかし同時にとても広い意味であいまいに使われ、今後とも「コミュニケーション」の理解と普及発展に貢献していきたい。

II. 報告事項

【1】第45回年次大会報告(森泉)

2015年6月13日(土)~14日(日)、南山大学(名古屋市)にて、第45回年次大会が森泉大会実行委員長のもと開催された。約120の参加者(スタッフを含む)があり、大会テーマである「コミュニケーションとジャーナリズム」を中心に、活発な議論と情報交換が行われた。盛会に終わったことに感謝する。

【2】各局および担当理事報告

1. 事務局

(1) 新しい理事会メンバー(清宮)

任期満了による交代のため、新しい理事として、松島綾先生(事務局:会計担当)、菅家知洋先生(事務局:書記及び会員サービス担当)、小西卓三先生(関東支部長)、池田理知子先生(九州支部長)が理事会に加わった。

(2) 入退会者および会費納入報告(清宮)

会員の状況について以下の通り報告があった。

- ・ 会員総数448名:一般会員429名、学生会員19名。(2015年12月25日現在)

昨年と同時期に比べ、11名の会員総数の増加となっている。

- ・ 各支部会員数:北海道=26名。東北=19名。関東=180名。中部=46名。関西=80名。中国・四国=20名。九州=58名。海外=10名。

- ・ 退会者14名、入会者25名(2015年6月12日~2015年12月24日)

(3) 第44回年次大会収支報告(松島)

44回年次大会についての会計報告があった(概要は事務局報告を参照)。参加費以外の収入として、南山大学から助成金をいただくことができた。

2. 学術局

(1) ジャーナル関連(坂井)

学会誌の発行について報告があった。『日本コミュニケーション研究』第44巻第1号が2015年11月30日に発行した。第44巻第2号は、2016年5月31日発行を予定し、7月31日に投稿を締め切った結果、8本を受理し、掲載可能が4本、掲載不可が4本であった。そのうち再査読論文を11月13日までに1本受理した。第45巻1号の投稿締め切りは2016年1月31日を予定している。

3. 広報局(高永・小山)

(1) ニュースレターの発行(小山)

ニュースレター110号(10月号)を発行した。川島先生瑞宝章受章を祝う記事を掲載した。

次号(111号)は、2016年2月初旬に発行の予定で準備中。表紙の写真、コラム「コミュニケーション教育」、書評を募

集する。

(2) 他学会への年次大会案内送付について (高永)

学術局作成の年次大会案内を1月下旬に、以下の学会へ送付した。今年度も同様に送付する予定。送付不要あるいは追加すべき学会があれば知らせていただきたい。

異文化教育学会、多文化関係学会、日本マス・コミュニケーション学会、表象文化論学会、国際ビジネスコミュニケーション学会、映画英語教育学会、外国語教育メディア学会、大学英語教育学会、日本ディベート学会、異文化コミュニケーション学会、日本語用論学会

(3) 第46回年次大会の広告・展示ブース設置募集について (高永)

2016年1月中旬に広告・展示ブース設置依頼文を用意し、広報局のリストと各理事からの新たな紹介先企業にEメールにて送付する。第45回大会では、広告に3社、展示ブースに5社から協力をいただいた。本年度も皆様の協力をお願いしたい。

広告原稿の取り寄せと、大会プログラム担当と印刷所への送付は3月末までの予定。

(4) ホームページ関連 (小山)

ホームページのトップページに、暫定的なロゴマークを掲載した。

Web版(pdf)のニューズレター(110号)をホームページに掲載した。

教員公募など、必要に応じて随時ホームページを更新した。

4. その他

宮原理事(海外渉外担当)から、国際コミュニケーション学会(ICA)の開催について報告があった。2016年6月9日から13日まで、福岡でICAが開催される。テーマは、Communication with Powerである。同時期に、JCA年次大会を西南学院大学で開催するので、ICAとのジョイント・セッションを検討いただきたい。また、福岡市内の宿泊先の数に限りがあるため、ICAとJCAの大会に参加する人の宿泊確保が心配である。さらに同時期に、プロ野球のゲームが開催されるため、早めの宿泊先確保をおすすめする。近隣ホテルの一つである「レジデンシャル・スイート」は、楽天をつうじて1月15日から予約可能である。例年、大会登録から運営まで協力いただいているトップツアーとも早めに相談し、JCA大会参加者用に宿泊先を確保いただくよう提案する。

5. 各支部報告

各支部長がそれぞれ報告を行った(内容は支部ニュースを参照)。

III. 審議事項

【1】第46回年次大会関係(学術局)

日程と会場について、2016年6月11日(土)~12日(日)に、西南学院大学(福岡市)での開催することを決定。教室の手配と西南学院大学からの補助金の申請について完了している。テーマは、「コミュニケーションとパワー」。大会実行委員会を検討し、実行委員長は野中理事とする。開催校担当委員として、西南学院大学から清宮または鳥越先生に委員を依頼。他にも、福岡在住の九州支部会員に応援を依頼する。学生スタッフは、西南学院大学の学生に依頼する。

大会への投稿締切日は、2016年2月19日とする。アブストラクトとプロシーディングスの原稿を提出。支部長推薦による発表、支部パネル、研究会パネルも応募可。提出された研究を審査し、3月半ばに学術局会議にて採択を決定。そこで、プログラム編成する。

学術講演の講演者を、ICAに参加される予定のリンダ・パットナム先生(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)に、お願いすること決定する。提案した清宮事務局長がはじめに打診し、その後の詳細については高井学術局長が継続して交渉にあたる。本学術講演は、広くコミュニケーション学を広める目的のため、会員以外の方にも広く公開し、これについてのみ入場を無料とする。例年とは異なり、講演の時間を延ばし、シンポジウム無しで、フロアからの質問という形式にする。英語による講演のため通訳についても考慮する。事前にパワーポイントを送ってもらい、それを日本語に翻訳した資料を配布するなど工夫する。しかし、質疑応答においては、通訳の補助を付けて行く方向で検討する。

ICA とのジョイント・セッションについて、1セッション 90分を使ったプロジェクトを事務局が検討し提案する。例えば、「東アジアのコミュニケーション」のようなトピックで、4~5人のICAとJCAのメンバーで議論する。

大会への参加登録から参加費の入金、当日受付の会計業務などについて、前回大会と同様に、トップツアーの御担当者にお願する。ホームページからの登録開始は、5月連休明けくらいになる。年次大会プログラムの発送も同じ時期とする。

【2】各局および担当理事

1. 事務局

(1) 支部助成金配布について

支部助成金の配布時期について、いくつかの支部から配布の手続きとそのタイミングについて検討依頼があった。これまで通りで問題ないという支部もある。北海道支部では、支部大会と支部総会を分け、後者をJCA年次大会より前に行うように変更したため、問題はない。しかし結論として、年次大会以降早い段階で、前年度報告書、今年度計画書、予決算(案)の3つの書類で助成金を申請し、その後大会で承認が得られた後で正式な予決算書を会計担当理事に送る。これにより助成金申請をよりスムーズにする。

(2) 研究会の助成金

レトリック研究会から、研究会のホームページについての作成費用について、助成金支給について審議依頼があった。支部助成と研究会の助成は重複もあり、分けて考える。今後については、レトリック研究会以外にも、新たな研究会の発足も視野に入れて、検討する。その上で、研究会の活動と助成金について明文化する必要があるため、原案を会長と事務局長で作って3月の理事会で審議していく。

今回のレトリック研究会からの依頼は、岡部先生の蔵書のアーカイブのアップロードのためであり、これは研究会への助成金としてではなく、JCAの活動に対する必要経費としてこれを認める。

(3) 所属支部の変更について

所属支部の移動は、基本的に個人が決定するもので、受入れについて支部の判断はない。電子ジャーナルを発行する九州支部のように、所属会員にメリットのある支部は、投稿規定などを検討し、支部移動の問題と分けて考える。また会員も投稿目的の移動は避けるべきである。これに付随して、支部の所属と移動に関して、ガイドラインの作成など、以下のようなことについても今後検討していく。1)支部に必ず入会すべきか、2)2つ以上の支部に所属できるのか、3)入会時に、居住地で所属支部が決められていないか。6月の年次大会までには明文化したい。そのため3月の理事会で審議する。研究会の所属も含めて、支部のあり方などについて、他学会を参考にしながら考えていく。

2. 事務局・広報局

(1) 新しいロゴマークの選考と決定

学会の英語名称の変更に伴い、JCAの新しいロゴマークを決定する。ロゴマーク選考にあつたては、透明性と公平性のあるプロセスであることを、初めに清宮事務局長が説明する。9月下旬までに、2社からのそれぞれ4つのデザイン案が提示され、計8案の中から4つを高永広報局長と清宮事務局長で予備審査を行った。その上で、JCA理事会の各局長と会長・副会長の6名からなるプロジェクトチームによって議論し、4案から一つに絞り込む。ここで選ばれたB社のD案を原案として12月理事会に提案し、最終的に承認され、新しいJCAのロゴマークとなった。2月発行の本ニューズレターにおいて、新しいロゴマークをお披露目し使用開始する。また、ジャーナルや支部活動などで利用できるように、広報局がロゴの使用規定を検討し提案していく。

3. 学術局

(1) ジャーナルの抜き刷りにについて

これまでジャーナルに掲載された著者は、抜き刷り50部を無料でいただけるというメリットがあった。しかし、特別企画のようなケースでは多くの著者がいるため、50部の抜き刷りはコストが上がる。そこで今後は抜き刷りを配布することをやめ、pdfを著者に配布することを決定する。就職に利用することも考慮したが、近年はpdfで問題

ないため、抜き刷りの配布は終了する。2016年10月発行のジャーナルの投稿募集の際に、この決定を示す。2016年5月発行のジャーナルについても、著者と印刷会社と相談しながら、pdfにできるよう進めていく。

(2) 今後の年次大会の開催校について

2017年は関西支部、京都ノートルダム大学にて開催、2018年は北海道支部、藤女子大学で開催を予定する。今後それぞれ担当する小山理事(2017年大会)と長谷川北海道支部長(2018年大会)協議のうえ、これを進めていく。

(3) J-stage への移行について

CiNiiのシステムは、2016年3月31日に最新号の受付が終了し、2017年3月にサービスそのものが終了する。そのため、2016年3月末までにJ-stageへの移行手続きをおこない、その後は一部の最新号を除いて無料公開とする。課金の期間や金額についてはJCA側から希望を出して、J-stage側が決定する。学術局では、早急にJ-stageに移行についての情報収集・原案の作成をおこなう。

4. その他

(1) ICA 大会への協力 (宮原)

ICA 福岡大会に参加希望する方で、その参加(日本入国)にビザが必要な研究者が出る可能性がある。ICAの本部がアメリカにあるため、日本にいる誰かがビザ手続きのため、招聘状を出す必要がある。現在はICA福岡の準備委員会で出そうと思っているが、JCAに依頼する可能性もある。今後継続して協議していく。

(2) 学会の口座名義の変更について (松島)

会計担当の理事が交代となり、銀行口座を変更する際に大変苦労した。銀行の窓口担当者の対応がまちまちで、この移管を今後スムーズにしていくことが求められる。基本的に用意するものは、総会議事録、予算、本人証明、印鑑である。総会議事録には、新たな会計担当理事の名前と所属などを明記する必要がある。これは支部の会計担当においても同じであり、会計担当交代がスムーズに行われるようなマニュアルを作成する。

【3】次回理事会開催日時・会場

2016年3月25日(金)13時より、関西大学東京センター(東京駅前サピアタワー)にて開催予定。

第46回年次大会会場校案内

第46回年次大会は2016年6月11日(土)・12日(日)に西南学院大学(福岡市早良区西新)で開催する予定です。今年はInternational Communication Association(ICA)の初の日本開催も福岡で行われます。そのため、期日と場所を統一し、何らかのセミナーなどを共同で行うことを計画すると同時に、互いの会員の交流を促進したいと考えております。両大会とも非常に近い会場で行われますので、ICA会員でない皆様もぜひ足を運んで、コミュニケーション学の規模の大きさを体感されてはいかがでしょうか。

今回の年次大会のテーマは「コミュニケーションとパワー」です。学術講演者にKent Ono教授(U of Utah)を予定しておりますが、Ono先生はメディアにおける少数民族(特にアジア系)の描写と彼らの社会的抑圧の関連について世界的にインパクトのある研究をされています。もちろん、学術講演の他にも大会テーマに関連した学術発表を募集いたします。広い意味でも構いませんので「コミュニケーションとパワー」に関する論文をお申し込みください。JCA理事および大会実行委員会一同、大会が盛り上がるように全力を注いでいく所存ではありますが、何といたっても大会の主役は参加していただく会員の方です。今年も個人研究発表と企画セッションの両方の申し込みを受け付けておりますので、奮ってご応募いただけるようお願いいたします。

また、発表の有無にかかわらず、出来るだけ多くの方にご来場いただき、年次大会を研究交流の場として活用していただけますことを期待しております。皆さん、福岡でお待ちしています！



西南コミュニティセンター(年次大会会場予定)



西南クロスプラザ(懇親会会場予定)

会場：西南学院大学(814-8511 福岡市早良区西新6-2-92)

交通アクセス：大学ウェブサイト(<http://www.seinan-gu.ac.jp/accessmap.html>)をご覧ください。

参加申し込み方法と宿泊について：今回も例年通り「トップツアー」を通じたWeb上での学会参加申し込みとなります。準備が整い次第、学会特別プランとしていくつかのホテルも一緒にご紹介いたします。申し込みは大会案内とともに送付される申し込み方法に従ってお手続きのほどよろしくお願いいたします。なお、年次大会が開催される日はプロ野球の人気カード(福岡ソフトバンクホークス vs 読売ジャイアンツ)が予定されています。ホテルの宿泊予約が非常に困難になることが予想されますのでお早めにご予約ください。

(学術局 野中昭彦)

学術局からのお知らせ

第46回年次大会 発表論文・企画セッション募集

日本コミュニケーション学会は、2016年6月11日(土)、12日(日)に、西南学院大学(福岡市早良区西新)で第46回年次大会の開催を予定しています。本年度の大会テーマは「コミュニケーションとパワー」です。このテーマのもと、多数の企画を準備すると同時に、会員の皆様からの研究発表とパネルディスカッションなどの企画を募集いたします。研究発表だけでなく、会員の相互の研究関心と教育実践の質的な向上を共有する「企画セッション」も募集します。形式は、パネルディスカッション、統一テーマの論文発表、ワークショップなど、自由な発想のもと、90分間のセッションを使って、学会と国際社会に有効な企画をぜひお寄せください。

研究発表と企画セッションの応募にあたり、プログラムに掲載される要旨と大会プロシーディングス出版用の要旨の2種類をご提出ください。

①プログラム掲載用要旨： 和文 800 字以内

英文 300 語以内

②プロシーディングス掲載用要旨： 和文要旨 3000 字以内 (脚注を含む)

英文 1000 語以内 (脚注を含む)

いずれも、A4 版 2 枚にすべてが収めること

なお、パネルなどの企画セッションに応募する場合、パネル全体としてそのセッションの概要を 800 字 (プログラム用) と 3000 字 (プロシーディングス用) の要旨に収めてください。発表者の要旨を別々に含める必要はなくなりました。詳しくは、学会ホームページの「プロシーディングス執筆規定」を参照してください。

応募の際は、メールの題目/subject に「JCA submission: 氏名」と必ず明記し、担当理事の野中宛 (anonaka@を
入れる)nakamura-u.ac.jp) まで電子メールでお送りください。応募の際、この手順に従っていただけない場合、自動的にスパムメールとして処理され、メールが行方不明となることもありますのでご注意ください。

応募締め切りは2016年2月19日(金)となりますので、期日には十分にご留意ください。大会の研究発表では、第一筆者(及び発表をおこなう当事者)がJCAの会員であることが規定によって定められています。申込みまでにJCAの会員登録をお済ませいただき、会員番号を明記ください。なお、会員番号は、本ニューズレターのあて名部分に印字されています。また年会費の未納のため、近年、会員資格の失効が発生していますので、あわせてご注意ください。

発表申し込みに関しましては、学会ホームページ (<http://www.caj1971.com/>) でもご覧いただけます。活気に溢れた大会になるよう、積極的に発表申し込みをいただきたく存じます。

Call for Papers for the 46th JCA Annual Convention

The Japan Communication Association will hold its 46th Annual Convention on Saturday, June 11th and Sunday, June 12th 2016, at Seinan Gakuin University in Fukuoka. The theme of the Convention will be “Communication and Power.” JCA will invite proposals for individual or panel presentations for competitive research papers dealing with any subjects of communication studies. Additionally, we would like to particularly invite a unique and quality session that contributes to the JCA members and activates our membership activities. The format of this theme session may vary depending on the session’s objectives, such as a thematically organized paper session, a panel symposium, or a workshop. We appreciate your proposal that facilitates research activities and teaching practices as well as encourages information sharing beneficial for the JCA members.

Those wishing to propose a paper presentation, a panel discussion, and a theme session should send an e-mail with an MS Word file of the abstract as an attachment to Akihiko Nonaka, Deputy Director of Academic Affairs, at anonaka(insert @ here) nakamura-u.ac.jp by Friday, February 19th, 2016.

We will publish the conference proceedings with abstracts. Hence two forms of abstracts should be submitted.

(1) For the convention program:

300 words or less in English or 800 characters or less in Japanese.

(2) For the proceedings:

Maximum of 1000 words in English (including foot/endnotes) or 3000 characters in Japanese (including foot/endnotes). The total volume of abstracts must be limited to 2 pages printed on A4-size paper.

Refer to the Submission Guidelines for JCA proceedings, and precisely follow the guidelines. Those who propose a panel or a theme session should submit a session overview of 2 pages maximum; abstracts of individual presenters are unnecessary.

Also, at your submission, please specifically type “JCA submission: [name]” on the subject of your mail. Failure to specify the subject as such may result in identifying your e-mail as a spam so that the mail will automatically be disposed.

The first author of the paper as well as a presenter in the Convention is strictly limited to the JCA members. If these responsible persons do not have the JCA membership, please join the JCA before submission and indicate your membership number on your paper : the number appears on the mailing label on the envelope of this letter. We also recommend that you clarify your current membership status because it is often lost by not paying the annual fee.

Those of you interested in submitting a proposal, please refer to the JCA homepage (<http://www.caj1971.com/>) for the submission requirements: “Submission Guidelines for JCA Proceedings.” We look forward to seeing you in Fukuoka!

学会誌に関するお知らせ

2015年11月末に『日本コミュニケーション研究』(Japanese Journal of Communication Studies)の第44巻1号が刊行されました。現在は5月末発行予定の第44巻2号の準備を進めています。内容は4本の研究論文と2015年度年次大会での学術講演者の林香里先生の論考を中心に掲載する予定です。5月下旬には皆様のもとにお届けできるよう編集作業を現在進めています。

また再査読システムの導入により、査読者のコメントをもとに投稿者がレベルアップをして学会誌に再投稿することが可能となっています。次号のジャーナルにも再査読システムを使用し掲載される論文が1本あります。今後も再査読システムが有効に働く工夫を重ねていきます。

現在は、11月発行予定の第45巻1号の締め切りが1月末に終了し、第45巻2号(2017年5月末発行予定)への投稿論文募集を開始し始めたところです。締め切りは7月末日です。投稿方法は、ワード等で作成されたファイルを指定メールアドレスに添付して送付してください。送付の際には、(1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「ファイル作成に使用した機種を加えた著者情報」、以上3つのファイルを添付してください。執筆・投稿の詳細は、公式ホームページにある「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」を参照してください。

送付の際、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付してください。メールアドレスは以下の通りです。

To: journal(@を入れる)caj1971.com
CC: jisakai(@を入れる)ed.tokyo-fukushi.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の坂井(jisakai@ed.tokyo-fukushi.ac.jp)までご連絡下さい。迅速に対応いたします。

常々述べていますが、学会誌は年次大会とともに学会の大きな柱です。学会誌の充実は、ひとえに皆様方の投稿次第といえます。皆様の多様な研究法に基づいた多様なコミュニケーション研究をぜひご投稿ください。現在は年2回(1月末と7月末)の投稿の機会があります。この年2回の機会を積極的に活用し、皆様の研究成果を分かち合っただけだったらと思います。日本のコミュニケーション研究を大いに盛り上げていく鍵は皆様のご投稿なのです。

学会賞応募に関するお知らせ

当学会では、学会賞審査対象の著書を常時募集しております。今年度は、2015年1月1日から12月31日に出版された本学会員によるオリジナルの著作が対象となります。共著・分担執筆による著作については、すべての執筆者が本学会員である必要はありませんが、著作への本学会員の貢献が顕著と認められるものについて審査の対象とします。応募資格に関して不明な点がある場合は、事前に下記問い合わせ先にお問い合わせください。

締め切りは、2016年2月29日(必着)となります。応募される会員は、下記募集要領に従い応募してください。なお審査結果の報告は、年次大会の授賞式での発表に代えさせていただきます。

応募資格：正会員(自薦、他薦は問いません)。

応募方法：希望者は審査用著書3冊とともに、応募する部門(「研究書の部」もしくは「教科書・啓蒙書の部」のいずれか)を特定した上で、1000字程度の著作概略および著者の名前・連絡先を明記したものを添えて応募してください(尚、著書は返却いたしませんのでご了承ください)。

応募数量：一人一冊

問い合わせ先および審査書類一式提出先：

学術局長 高井次郎

住所：464-8604 名古屋市千種区不老町 名古屋大学教育学部

電話&ファックス：052-789-2653

E-mail: jtakai(@を代入)cc.nagoya-u.ac.jp

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. 会費納入のお願い

3月初旬に会費未納の方に振込用紙をお送りする予定です。今年度の会費の再請求は今回で最後となります。お早めにお支払いただきますようお願い申し上げます。会費2年分滞納でジャーナルの最新号を受け取ることができず、また3年分滞納で、除名処分の対象となりますのでご注意ください。

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変わられた場合には、速やかに学会支援機構までご連絡いただくか、学会ホームページのWeb システム上で変更をお願い致します。変更の際には、会員番号とパスワードが必要になります。会員番号は学会支援機構からの郵便物の宛名の下に記載されている10桁の番号です。パスワードを忘れた場合、生年月日が登録されていればご自身での確認が可能です。パスワードをお忘れになり、かつ、生年月日を登録されていない場合は、生年月日の登録を直接学会支援機構までご依頼ください。なお、従来通りのメールや葉書等でのご連絡も受け付けますが、学会事務局ではなく、学会支援機構までお願い致します。

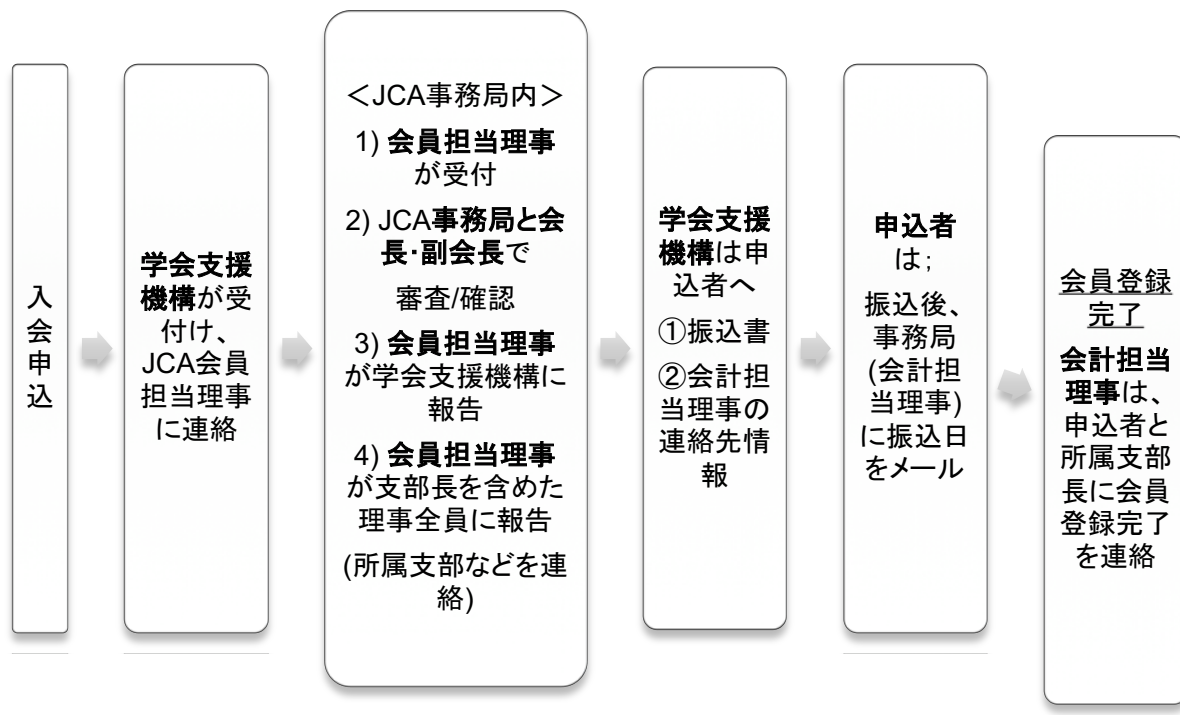
3. 学会発刊物の購入申込みと閲覧、複写申込みについて

ジャーナルバックナンバー、記念論文集などの学会発刊物をお求めになりたい場合は、学会支援機構にお問い合わせくださいますようお願い申し上げます。なお、ジャーナル、記念論文集については、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) に、著者により公開可とされた論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せず、複写をご希望の場合は、学会支援機構までお問い合わせください。

4. 新規会員の手続き

JCAでは、新しい学会会員を随時受け付けています。入会しやすいシステムに移行するため、以下のような流れ形で、新規会員の手続きを行います。とくに、会費納入について迅速に確認するため、新規の申込者には、会計担当理事にメールにて会費の振込した日をお知らせいただくようお願いすることにいたしました。その上でJCA事務局から申込者と所属支部長に、会員登録の完了を連絡するよういたします。ご不明な点がございましたら、事務局までご連絡ください。

皆様のご協力をお願い申し上げます。



2015年度年次大会収支報告

〈収入の部〉		〈支出の部〉	
大会参加費	352,500	プログラム作成費	275,349
懇親会参加費	195,000	プロシーディングス費	79,272
弁当代	23,000	ポスター製作費	83,808
寄贈図書売上	0	講師謝礼	100,000
ジャーナル売上	1,500	懇親会費	200,000
広告費	40,000	弁当代	54,779
展示費	30,000	茶菓代	16,883
助成金	200,000	人件費	197,000
学会補助	356,248	設営費および事務費	35,587
		業務委託費	48,600
		添乗員旅費	66,960
		会議費	40,010
合計	1,198,248	合計	1,198,248

広報局便り

広報局からのお知らせ

- ① JCA の新しいロゴマークが決まりました。今回のニューズレターならびに JCA のホームページ上で紹介しています。これからは、ジャーナルやニューズレター、支部報告などでも新しいロゴマークを使用することになります。ロゴマークを使うにあたって、広報局で使用規則の作成を進めています。各支部でご使用になる場合には、広報局にお問い合わせください。
- ② ジャーナル投稿専用アドレスの運用について
学術局と連携し、ジャーナル専用のメールアドレス (journal(@を入れる)caj1971.com) で次号投稿の受付を行います。広報局では他学会の情報や教員公募情報なども積極的にアップしていくことにしております。現在も、いくつかの研究学会の年次大会案内や教員公募などの情報をアップしています。ぜひ、ご活用ください。
- ③ 会員の皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報ください。ホームページにアップしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://www.caj1971.com>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸甚です。
- ⑤ 広報局では、JCA ニューズレターへのご寄稿を募集しております。次頁の要領をご覧ください、奮ってご寄稿ください。

JCA ニューズレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニューズレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：小山哲春 (tkoyama(@を入れる)notredame.ac.jp)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文で 250～500 字程度の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

③ 書評

コミュニケーションおよび関連領域の著書に関する書評を受け付けております。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

④ NL 表紙の写真

ニューズレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会の NL 表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。(写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。)

支部ニュース

北海道支部

(副支部長 足利 俊彦)

2015年11月7日(土)に、藤女子大学北16条キャンパスにて第24回(2015年度)北海道支部研究大会が開催されました。今回のテーマは「コミュニケーション研究の今～CAJからJCA/ICAへ～」で、研究発表、授業実践報告、基調講演、及びシンポジウムが行われ、会員・非会員を合わせて21名の参加がありました。

研究発表の1件目は北海道大学大学院生の三ツ木真実氏による「言語記録の質的データ分析に着手する:SCAT(Steps for Coding and Theorization)によるアプローチ」、2件目は札幌国際大学の竹内康二先生による「明示的文法教授法は暗示的知識を獲得させるか」で、近年注目されている言語記録の質的分析方法と第2言語習得理論に関する最新の知見についてご発表いただきました。

また授業実践報告では、北海道支部役員4名(長谷川聡、伊藤明美、足利俊彦、目時光紀)が学習者のやる気を引き出す効果的な指導方法を紹介しました。

さらに基調講演では本学会前会長である宮原哲先生をお迎えして「日本のコミュニケーション研究・教育の現在・過去・未来」というテーマで、1970年代から現在に至る日本のコミュニケーション学研究の推移と今後の展望についてご講演いただきました。

最後のシンポジウムでは「コミュニケーションの実践～分野別にみたアプローチのあり方と課題」と題して、北海道警察本部の荒木敬大氏、近畿日本ツーリストの蛸子佳晃氏、札幌市立北野台中学校の河上昌志氏、看護師で天使大学大学院生の村田詠子氏をお招きし、各分野で必要とされるコミュニケーション・スキルや問題点についてお話しいただいた後、参加者も交えて活発な議論を行い、研究だけでは理解できない各分野のコミュニケーションの現状について認識を深める良い機会となりました。



さて2016年3月6日(日)には北海道支部研究会が開催されます。今回も大学英語教育学会北海道支部、北海道英語教育学会との合同開催となります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

2015年度北海道支部研究会(北海道内3学会合同開催)

日時:2016年3月6日(日)13:00より(予定)

場所:札幌市立大学サテライトキャンパス

東北支部

(支部長 川内 規会)

活動報告

1. ニューズレター第25号の発行
2. 支部HP <http://www.caj1971.com/~tohoku/index.html> の更新
3. 第16回東北支部研究大会の開催
(2015年11月28日、盛岡市、出席者16名)

【研究発表3件】

- ・「海外研修を通じた学生の成長—コミュニケーション教育の観点から—」会澤まりえ(尚絅学院大学)
- ・「祭りとコミュニケーション—スズメ踊りに焦点を当てて」宮曾根美香(東北工業大学)
- ・「看護学部における『対人コミュニケーション』授業のインストラクショナル・デザイン:初年児教育にお

けるアクティブ・ラーニングの実践とコミュニケーション学からの課題」石橋嘉一（青森中央学院大学）

【シンポジウム】

- ・「コミュニケーション教育としての海外研修の企画と実行」

東南アジア諸国において、語学研修を主要目的としない研修（ボランティア活動、観光業研修など）を企画・実行されている宇治谷映子先生（中部支部・名古屋外国語大学）、森越京子先生（北海道支部・北星学園大学短期大学部）をお迎えし、その目的・成果・課題などをコミュニケーション教育の視点からお話していただきました。

【追悼セッション】

- ・「元東北支部長 蔵元礼子先生追悼セッション～感謝を込めて」

本学会の東北支部支部長を4年間務めてくださった蔵元礼子先生（元青森公立大学教授）が、2015年10月に病氣療養中のところ御逝去されました。先生のこれまでのご尽力に感謝し、生前の様子を振り返りながらしのぶ時間を参加者と共有しました。



今後の活動予定

1. ニュースレター第26号の発行
2. 2015年度東北支部定例研究会の開催
 - ・2016年3月19日(土)13:00～（東北工業大学一番町ロビー 4Fホール）
 - ・研究発表および授業の実践報告など
3. 支部HPの随時更新

中部支部

（支部長 藤巻 光浩）

1. 12月19日に愛知淑徳大学で支部大会を行いました。レトリック研究会との共催で、テーマは「シティズンシップ教育とコミュニケーション学」でした。このテーマについて議論した報告論文3本について、応答者やオーディエンスと共に議論しました。

まず、シティズンシップとは、公共圏で人が「市民」として可視化されるための条件を整える概念で、近代市民社会に固有な歴史的なものです。コミュニケーションは、この諸条件を整えるために駆使されるべく、市民社会を構成する単位なのですが、決して万能のものではありません。様々な理由により、人が「市民」として顕われることが困難ことがあります。ここで、コミュニケーションの在り方を分析する視座、それを育むコミュニケーション教育を強く求めています。例えば、欧州評議会では、国境をまたいで人が行き来する中で、コミュニケーション教育が求められています。また、そのようなコミュニケーション教育は、シティズンシップ教育そのものといってもいいでしょう。

この支部大会では、移民子弟の受ける教育が抱える問題、核エネルギーやその技術を展示する科学館が育もうとする市民概念、また、戦後70年談話が受ける拘束を考慮したスピーチ教育の問題などを通して、この社会で求められる「市民」概念とコミュニケーション教育との接点について、密度の濃い意見交換をしました。近代市民社会的なシティズンシップや、そこで求められるコミュニケーション教育が理想的であることは、参加者の間で積極的に共有されたのですが、昨今の情勢をみるにつけ、「コミュニケーション」や「市民」概念は瀕死の状態にあることは、極めて悲観的に共有されました。そこで、登場したアイディアは、JCAがコミュニケーションを生業とする研究者の集まりであることを踏まえ、コミュニケーション概念のねじまげや悪用をした個人、団体、組織に、「ブラック・コミュニケーション大賞」を与えるという企画案まで出ました。これは、一考に値すると思ったのは、私だけではないと思います。

2. 中部支部のニューズレターには書評欄があります。是非、投稿ください。毎年、10本ほどの書評を掲載していますが、大学院生によるフレッシュな書評でも、熟練研究者による渾身の本や記事でも、コミュニケーションに関係する本の記事であれば何でも受け付けています。2月末が締め切りです。送付先は、宮崎新先生に送付ください。メールアドレスは、以下の通りです。

miyazaki(@をを入れる)nufs.ac.jp



関西支部秋季研究会

関西支部

(支部長 守崎 誠一)

関西支部秋季研究会を11月7日(土)に、大阪駅前の「居酒屋ゆるは」で開催し、12名の参加がありました。テーマを「個の時代における消費者とのコミュニケーション」とし、昨年の秋季研究会に引き続いて最初から飲食を共にしながら議論を進めるシンポジオンの形式を取りました。

支部長からの講演者紹介の後、大手食品メーカーの消費者リサーチ部門に勤務されている谷氏に「個の時代における消費者とのコミュニケーション」というタイトルで講演をしていただきました。講演内容は、「わたし」の時代におけるニーズの多様化に対応するための「現場主義」のリサーチ手法である「行動観察およびビジネス・エスノグラフィー」について、企業・組織における消費者との直接的なコミュニケーションの実例を紹介しながら、「企業と消費者とのコミュニケーション」についてお話していただきました。

参加者が少人数であったことから、講演途中にも参加者が適宜質問やコメントを講演者に投げかけ、それに対して応答しながら話題を展開していただくかたちを取り、学びの多い時間を持つことができました。

2016年3月12日(土)には、大阪キリスト教短期大学で支部大会を開催いたします。詳細については、随時支部のホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください。

中国・四国支部

(支部長 Rudolf Reinelt)

12月12日(土)に福山大学(広島県福山市)にて、第18回JCA中国四国支部大会を開催いたしました。今大会はリメディアル教育をメインテーマとして外国語教育の各段階での取り組みやアプローチを紹介して頂き議論しました。

大学入学以前の教育については、島根大学の谷みどり先生をお招きし、「小中高校生に見られる英語学習における困り感」と題して、文部科学省の最近の取り組みとそれについての研究を紹介して頂きました。

学術発表では、愛媛大学の中山先生に“Remedial Education for English Teaching: A Case Study at Ehime University”で愛媛大学における英語のサポートが必要と思われる学生のためのいくつかの取り組みを紹介して頂きました。大学一年生の共通教育レベルについてはライネルトが“2FL Learning as Remedial Education”でドイツ語による第二外国語学習を国際化の再教育として紹介しました。また、高学年時での専門科目以外の外国語学習としてライネルトは「共通教育連続第二外国語(ドイツ語)教育(S1,S2,S3)における remedial education」の試みを発表しました。

発表後のシンポジウムではリメディアル教育以外にも中国四国地区における学校及び大学における最近の教育動向とそれに関するコミュニケーション問題について触れました。

今回は初めての福山での開催となりましたが、少人数ながらJCA中国四国支部以外の参加者もあり、これまでの支部大会とは少し違ったフレッシュな内容とな

りました。当日行なわれた講演と発表の内容は、後日 CAJcsNL40 号として発行し、同時に愛媛大学 HP にも掲載する予定です。

次回の第 19 回中国四国支部大会は例年通り 12 月頃に予定しておりますが、会場は未定です。



午前中の研究発表の様様



水俣病資料館で展示の解説をする山下さん



水俣病歴史考証館の見学

九州支部

(支部長 池田 理知子)

1. 第 22 回支部大会を、2015 年 10 月 3 日 (土) と 4 日 (日) の二日にわたって、熊本県水俣市の熊本学園大学水俣学現地研究センターと水俣市公民館で開催しました。今年は「環境問題とコミュニケーション」をテーマに、土曜日の午前中は研究発表 (合計 6 本)、午後は基調講演と水俣市内バスツアー、そして二日目の水俣病歴史考証館の見学といった形で開催いたしました。講演は公開講座とし、水俣病の原因企業であるチッソの第一労組元委員長で、企業組合エコネットみなまたの代表理事を務めている山下善寛さんに「水俣の環境問題と健康被害」というテーマで話してもらいました。その後、マイクロバスで市内の水俣病に関連する場所を山下さんに案内してもらったり、水俣病資料館で「語り部」の南アユ子さんの講話に参加したりと盛りだくさんの内容でした。午前中の参加者が 20 名、午後の公開講座が 50 名、水俣市内バスツアーが 20 名、そして二日目が 6 名と、熊本と鹿児島県の県境に位置し、けっして行きやすいとはいえない場所でこれだけの参加者が集まったということはまずまずの成果だと思っています。支部大会の詳しい報告は、九州支部のニュースレターをホームページにてご覧ください。

2. 支部紀要『九州コミュニケーション研究』(KYUSHU COMMUNICATION STUDIES) 第 13 号を 10 月末に発行しました。支部のホームページに掲載されておりますので、お読みください。次号 (第 14 号) の原稿締め切りは 2016 年 1 月末です。九州支部の会員以外の方でも投稿できますので、ご一考いただければと思います。
3. 支部のニュースレター (第 26 号) を 2016 年 1 月に発行しました。内容は、支部大会の報告が中心ですが、そのほかに書評や川島先生、橋本先生からご寄稿いただいた文章も掲載されております。支部のホームページをご覧ください。


コラム

コミュニケーション教育 (第5回)

**Some reflections on 35 years of communication teaching
in a university English department**

Gregory Peterson

(Professor Emeritus: Kyoto Notre Dame University)
**Introduction**

In 1977, when I began to teach at Kyoto Notre Dame University (then Notre Dame Women's College), the Department of English Language and Literature offered two academic concentrations: Linguistics and English & American Literature. In 1981 we added a third concentration, Communication Arts, now Communication, which included many practical subjects and a few academic courses in human communication and media. I have taught various communication courses since 1981. Along with a seminar, research guidance, and an introductory course, I have been teaching elective lecture courses since 1981 and laboratory courses since 1995. After retirement from full-time service in March, 2014, I continue to teach elective courses as a part-time instructor. This essay shares some of my thoughts after 35 of teaching communication in English to mostly Japanese students in a small Catholic university.

Lecture courses

I began to teach interpersonal and intercultural communication in 1981. My goals are to help students deepen their understanding of communication processes, raise their English proficiency, and learn to communicate skillfully with courage, empathy, and integrity. Course contents are fairly orthodox from an American perspective, but content is relatively limited. Each 2-credit course has only 15 weekly 90-minute sessions. Students' final grades depend on class participation (30%), weekly email to me (20%), and reports (50%). I teach mostly in English, and students have a wide range of English language proficiency.

Most of our students can understand sophisticated concepts in English if they are presented carefully. At first I created weekly handouts, using excerpts from various sources. I quickly discovered that American college textbooks did not work. The best texts were very expensive and contained far too much material. Most lighter texts were too wordy and culture-bound, written for white, middle-class American young people. Gradually I replaced excerpts with original content, and after several years replaced handouts with a textbook for each of my lecture courses. I revise them every year. In addition to academic materials, I add other resources, for example, the Universal Declaration of Human Rights in English and Japanese. Recently my texts have been about 80 pages on B5 paper. Students receive printed copies. They may also read them as Web pages or as e-books for PCs and smartphones. I try not to oversimplify important concepts, but my compact explanations and examples require elucidation in class.

Computer lab courses

Since 1995 I have taught laboratory courses in computer-mediated communication (CMC). My goals are to help students deepen their understanding of communication technology and the Web, appreciate certain technical standards, and gain critical skills, self-confidence, and empathy for people with whom they may communicate. Course contents include various issues in global communication technology. The main weekly

class activity is Web authoring in English. Students' Web pages can be only from computers on the campus LAN. They consider various issues as they work. For example, they may have to make value judgments about the use of photographs that might raise ethical or legal issues.

These courses are somewhat unusual in that students edit source code in Hypertext Markup Language (HTML) and Cascading Style Sheets (CSS) on Unix or GNU/Linux workstations. The editing software, GNU Emacs, highlights errors in their HTML code, which helps them learn to see details, judge their work critically, and appreciate the importance of technical standards. Also, consideration of the needs of Web users is a major issue. Students' Web pages must conform to international accessibility standards. For example, images must have alternate textual descriptions, and text elements must pass color contrast tests. The courses begin with steep learning curves that gradually taper off as students master their tools and become more autonomous Web authors.

Since 2013 I have been teaching media studies and media production in computer labs with the same software as my CMC classes. The media studies course emphasizes principles of media and analyses of specific works. Students write Web pages that include links and critical reviews. Media production students create Web portfolios of multimedia projects. I have made a short text for each of these courses. Texts are available only as Web pages that are revised as we proceed. The course includes advanced media editing skills, and I have been frustrated by the lack of time to produce excellent work. In 2016 it will become a 3-credit course with 135-minute sessions. Hopefully, longer sessions will enable students to master complex skills and to create more sophisticated and polished final projects.

Pedagogy and learner engagement

Project-based learning in my computer lab courses motivates students very well. Concepts and skills are presented in sequence and reviewed as needed. For example, the use of color in CSS stylesheets is taught after basic text editing and before photo editing. Specific skills, for example, how to resize and save photos, are reviewed for students when they ask for help, while more ambitious students may create longer texts, add more photos, or experiment with advanced styles. Such just-in-time teaching helps students meet creative needs as new knowledge and skills become integrated into their Web authoring routines. Student evaluations of these courses have been very enthusiastic, and in nearly every class I have been pleased with students' work. Of course, such project-based learning is costly. Computer labs are expensive, and class sizes are limited to about 20 students.

Learner engagement has been a more difficult challenge in lecture classes. "Active learning" seems to be a popular topic now, although it has been promoted in universities since the early 1990s and used by some educators for decades. As an English language teacher I have been developing materials and using various methods and techniques to engage students since the mid-1970s. Some "communication activities" in English language textbooks for adult learners can be used in or adapted for communication courses. For example, some values clarification activities work well in interpersonal or intercultural communication classes. Of course, "active learning" does little to improve lecture classes unless students are deeply engaged in significant learning.

Over the years I have had to adjust to dramatic class size changes. For example, when my Intercultural Communication classes had only 20-25 students who spoke English fairly well, we held small-group discussions of case studies followed by debates between groups. Later, as class sizes grew to as many as 250 students in crowded lecture halls, I tried whole-class activities such as "quiz shows" in which students raised their hands in response to multiple-choice questions. As my class sizes have gone back down

to 30-50, I have introduced other activities. In 90-minute classes I try to limit lectures to 50 minutes and devote at least 40 minutes to other activities, such as self-assessment questionnaires, short films, and small group discussions.

In the last 15-20 minutes of each class session students write short personal essays about experiences or opinions related to the weekly topic. Carefully written writing assignments can motivate deep reflection and strong intellectual or emotional responses. For many years this weekly writing has been extremely useful and appreciated by students. There is great value in sharing essays among classmates, but respect for students' privacy is vital. In most lecture classes we can enable share anonymous sharing. I used to write weekly summaries of students' essays, but it took a long time and my words could not capture the intensity of their experiences. Since 2005 I have been producing weekly podcasts, audio recordings in which I read selected essays or parts of essays. Recordings are typically 10-15 minutes for 20-25 selected essays. To protect students' privacy I remove any identifying information before I read them, and sometimes I must omit entire essays. Students listen to the recordings on the class website and then send me brief summaries and comments by email. I reply to each message.

In course evaluations at the end of each term most students saying that weekly writing helps them think more deeply and write English more clearly. Only a minority of students send email about the audio recordings. They say they gain confidence in listening to English and a deeper appreciation of diversity among their classmates. Quite a few students say that they listen to some recordings without sending email. Engagement of students in my lecture courses varies much more than in computer lab courses. Some students do as little as possible to pass, while some sit up front, ask questions, write detailed essays, and send detailed comments about each audio recording. I wish more students would participate more actively, but I also believe that active engagement is most meaningful when it is voluntary.

In Spring 2015 I modified writing activities for sophomores in our new Global English Course. This group of 23 students with high levels of English proficiency was preparing to study abroad for a semester or year. They were comfortable in small-group and whole-class discussions. Personal writing was done as homework in the form of email that they sent to everyone on the class mailing list. Since they identified themselves by email, they had to protect their own privacy. Compared with students in other lecture classes, their English was excellent; however, their writing seemed more superficial. Their experiences were similar to students in other classes, but they did not reveal as much deep reflection or analysis. Students seem to gain more by writing quickly in class and knowing that their privacy is respected.

Conclusion

Three decades of experience have taught me to be humble about how much I can teach a group of young people in 15 weekly classes. Students learn something, however, and I believe that learners can benefit greatly from deep, personal engagement in the stuff that we try to teach. In my courses that stuff is related to media or interpersonal, intercultural, and computer-mediated communication, but the same principles apply broadly. For example, students may be deeply engaged in the study of persuasion, and perhaps even reflect on how they form attitudes and opinions, as they prepare group presentations for public service campaigns or conduct individual research on the use of stereotypes in government propaganda. A course might start with theory and lead to research or other tasks, or it might begin with tasks that require new ideas, knowledge, and skills. In any case, good communication courses present significant issues or questions, tasks that require personal growth or the development of specific skills, and opportunities for students to reflect deeply on what they are learning.

NL の電子版への完全移行のお知らせと メールアドレス登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

日本コミュニケーション学会ニュースレターは永きにわたり紙媒体でお届けして参りましたが、107号より電子版に完全移行いたしました。当面はPDF版をHPに掲載する予定ですが、将来的には学会全体のメーリングリストを構築してのメールマガジンの配信も視野に入れ、さらに検討を続けていきます。つきましては、会員の皆様には、本学会HP（学会支援機構データベース）にてメールアドレスの登録をお願い申し上げます（下記の方法をご覧ください。）今後、NLの配信を含めた学会の広報活動を効率化し、会員の皆様とより情報価の高いコミュニケーションを取れますよう、ご協力をお願いいたします。

- ① 本学会 HP (<http://www.caj1971.com>) にアクセス
- ② 左側メニュー「会員各種手続き（Membership）」をクリック
- ③ ページ中頃の「各種変更手続き」の下「1 オンラインで Web 登録情報確認・変更、会費残高照会のページ」をクリック
- ④ 会員番号とパスワードを利用してログインし、メールアドレスを登録（変更）して下さい。

* ご登録いただきましたメールアドレスは、学会（学生支援機構）が責任を持って管理し、学会からのお知らせの配信（および、これに係るメーリングリストの構築）以外の目的では使用しません。

- 会員番号は、学会からの郵送物の宛名ラベルの中に印字されています（10桁の番号）
- パスワードをお忘れの場合には、上記④の画面で、「パスワードの問い合わせ」をクリックして手続きを行って下さい。

編集後記

NL111号をお届けいたします。暖冬予報の中、爆弾低気圧だとか史上まれに見える大寒波だとかいう物騒で仰々しいものにしばし襲われ、九州や沖縄でも普段はお目にかかることの少ない光景が見られたようですが、会員の皆様にはいかにお過ごしでしょうか。京都にも一冬に2～3度ほど積雪がありますが、普段は観光客の多い古寺が積雪の早朝に見せる静まった佇まいは、京都の住人にしばし観光客の方々から静かな京風情を返してくれる特別な時間でもあります。古寺の写真はありませんが、我が小さな研究室（下鴨）から望む古都の雪景色をお楽しみください。



比叡山



五山妙法の「妙」



五山大文字を遥かに望む
広報局 ニュースレター担当 小山哲春